



# 片倉もとこ記念沙漠文化財団 ニューズレター

2015. 12 No.2



リヤド・マスマク城内一室  
王族の生活空間が再現されている

## ● もくじ

- P2……「アラムコ・片倉沙漠文化協賛金 (Aramco Motoko Katakura Desert Culture Fund)」  
に関する協定締結について
- P3-18…2015年アラムコ・片倉沙漠文化協賛金 サウジアラビア事前現地調査報告
- p3-6…… 調査概要, 団員, 調査行程 縄田 浩志
- 【団員からの報告】
- p6-8…… ワーディ・ファータマ再調査の手がかり 片倉 邦雄
- p8-10…… 沙漠に生きるひとびと 吹田 靖子
- p11-12… 3つの宿題・・・ワーディ・ファータマを訪ねて 郡司 みさお
- p12-15… 事前現地調査番外編—マッカ小巡礼行— 河田 尚子
- p15-18… 片倉もとこの視線の先 藤本 悠子
- P18……写真集の紹介  
Megumi Yoshitake 「ARAB Bedouin of the Syrian Desert Story of Family」 遠藤 仁
- P19……沙漠学会写真展示  
「半世紀前 片倉もとこの見たオアシス ワーディ・ファータマ」報告 河田 尚子
- P20…… 代表理事交代と新役員の紹介  
お知らせ

# 「アラムコ・片倉沙漠文化協賛金 (Aramco Motoko Katakura Desert Culture Fund)」 に関する協定締結について

2014年12月18日、当財団は、サウジアラビアの国営石油会社サウジアラムコの日本法人アラムコ・アジア・ジャパン株式会社との間で、「アラムコ・片倉沙漠文化協賛金 (Aramco Motoko Katakura Desert Culture Fund)」に関する協定を締結しました。本協定に基づき、アラムコ・アジア・ジャパンより提供された協賛金20万ドルの運用を本年より開始します。期間は、2015年1月1日～2019年12月31日の5年間です。

協定調印式において、アルクネイニ代表取締役社長より「貴財団の活動がサウジアラビア双方にとって意義深いものであるということ、そして貴財団の活動が今後大きく発展していくことを望みそれに向けた支援をしていきたい」との激励をいただきました。



財団からアラムコ・アジア・ジャパンへ、ワーディ・ファータマ (サウジアラビア：片倉もとこ撮影) 写真を謹呈しました。

(左：アルクネイニ代表取締役社長，右：片倉邦雄評議員会議長)

片倉評議員会議長は、サウジアラムコおよびアラムコ・アジア・ジャパンの片倉もとこの業績に対する評価に深く感謝し、沙漠文化研究、沙漠文化芸術への支援・育成のために協賛金を最大限に活用していくことを表明しました。当協賛金は、主に下記3点を目的に掲げて事業を進めます。

1. Research and studies of Desert Culture, such as follow-up of Prof. Motoko Katakura's field work in Wadi Fatima  
沙漠文化に関する調査 (片倉もとこのワーディ・ファータマにおけるフィールドワークのフォローアップなど) および学際的研究
2. Art performance of Desert Culture  
沙漠文化に関する芸術活動
3. Hosting lectures, exhibitions, seminars, symposiums etc., to introduce Desert Culture  
沙漠文化を紹介する講演会、展示会、セミナー、シンポジウム等

協賛金プロジェクト第一弾として、本年3月25日～29日、サウジアラビアのワーディ・ファータマへ財団関係者6名が訪れました (詳細報告はp.3～18参照)。片倉もとこが約半世紀前に訪れた地への再訪、親交を深めた人びとへの聞き取りをはじめ、新たな学術的成果を期待できる沙漠文化研究の一つとして、今後調査を重ねてまいります。

## アラムコ・アジア・ジャパン株式会社および サウジアラムコについて

### アラムコ・アジア・ジャパン株式会社

世界最大の石油・化学企業であるサウジアラムコの関連会社です。日本・台湾におけるサウジアラムコの事業に対し、マーケティング、資材調達、ロジスティクス、品質保証、IT、新規事業開発などのサポートサービスを提供しています。

### サウジアラムコ

サウジアラビア王国の国営石油会社であるサウジアラムコは、炭化水素資源の探鉱、生産、精製、流通、輸送、販売におけるグローバルな石油・化学企業であり、また、世界最大の原油および天然ガス液 (NGL) 輸出企業です。世界の石油市場における供給者としてきわめて重要な役割を果たしています。

# 2015年アラムコ・片倉沙漠文化基金 サウジアラビア事前現地調査報告

アラムコ・アジア・ジャパンからの協賛金プロジェクトとして、2015年3月25日～29日サウジアラビアのワーディ・ファーティマで事前現地調査を実施しました。その内容について報告します。

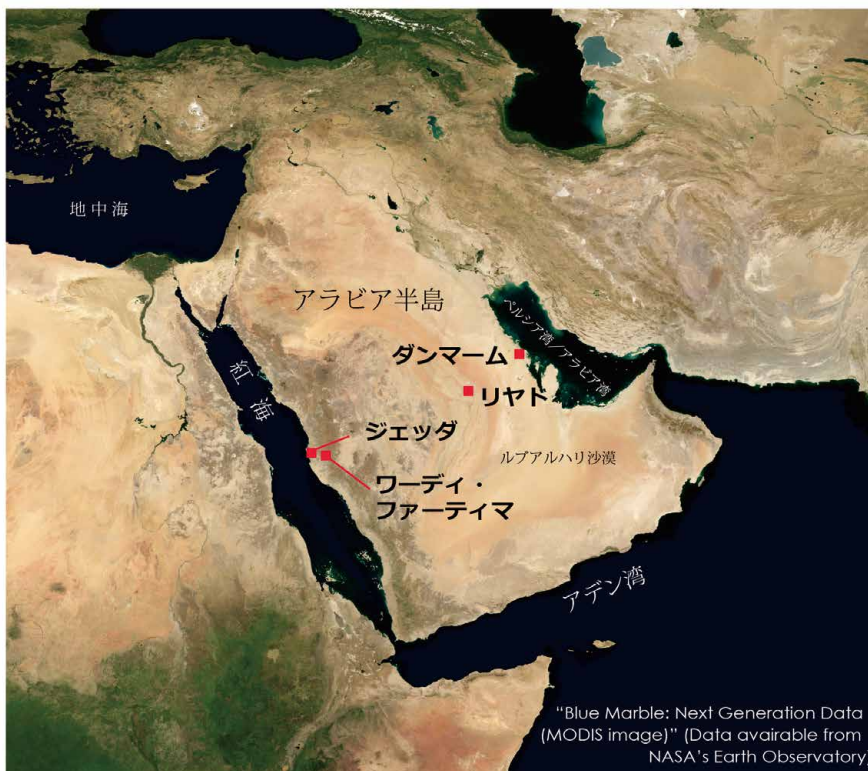
## 現地調査概要

団長 縄田 浩志

ワーディ・ファーティマはサウジアラビア紅海沿岸の都市ジェッダの東75km、マッカの西30kmに位置する、アラブ遊牧民（ベドウィン）の共同体である。片倉もこの調査時には31の集落があり、人口は2万人弱であった。（『Bedouin Village』、p.58）

「ワーディ」とは、ごくまれに降雨があった時、一時的にできる浅い川で、日本では「ワジ」となったり、涸河、涸れ谷と呼ばれている。遊牧民の用法に従うと、雨によって一時的にできる河の時は「サイル」、水が干上がってしまった状態のことを「ワーディ」とよぶ。

その昔、フザーア族のファーティマという勇ましい女性騎士がいて、ワーディのある沙漠の一角を占領した。それ以来、ワーディ・ファーティマと呼ばれてきたという。定住しているもの、遊牧しているもの、半移動の生活をしているものなど、生活様式はさまざまだが、みな「バ



ドゥ（ベドウィン）」とよばれる、アラビアの人々である。（『アラビア・ノート』p.4、134）

\* \* \* \* \*

1977年に発表された片倉もところ先生による最初の著作『Bedouin Village: A Study of a Saudi Arabian People in Transition』では、ワーディ・ファーティマを舞台としてその自然環境、歴史、生計経済、土地利用、市場経済との関係、儀礼、人口動態、社会ネットワークなどについて、地理学的また民族学的に詳細な記述と分析が施されている。英語による著作『Bedouin Village』が定量的データによる骨であったとすれば、1980年に発表された日本語による最初の著作『アラビア・ノート—アラブの原像を求めて』は定性的データによる肉づきである、と先生は述べておられる。

約半世紀をへて、これらの著作に記された人々の暮らしはいったいどうなったのであろうか？そもそも集落自体が今も存在しているのだろうか？片倉もところ先生と交流のあった方々は、当時のことをどれほど記憶に留めているのだろうか？6名の団員は、期待と不安に胸を膨らませながら、サウジアラビアに向かった。

以下ではまず、団員、調査行程、訪問地、訪問者について概要を紹介した上で、片倉邦雄評議員会議長、吹田靖子評議員、郡司みさお理事、河田尚子理事、藤本悠子財団事務局秘書の団員それぞれから、今回の現地調査の感想、意義、展望などを示していただいた。

## 団員

縄田浩志（理事。秋田大学国際資源学部教授）  
片倉邦雄（評議員。元U A E、イラク、エジプト大使）  
吹田靖子（評議員。「ハナエモリ・スタジオ」アドバイザー）  
河田尚子（理事。世界宗教者平和会義（WCRP）日本委員会婦人部会委員）  
郡司みさお（理事。G-プランニング主宰。早稲田大学国際情報通信研究センター研究員）  
藤本悠子（事務局秘書。東京大学大学院総合文化研究科・修士課程修了）



調査団とアブドゥルラヒームさん（中央左）とイードさん（中央右隣）  
イードさん宅前にて

## 調査行程

■一日目 2015年3月23日（月）

- 01:30 羽田発
- 07:30 ドーハ着
- 08:35 ドーハ発
- 09:35 ダンマーム着
- 13:30 挨拶およびミーティング（サウジアラムコ本社、  
キング・アブドゥルアジズ世界文化センター  
[King Abdulaziz Center for World Culture] ビル）
- 14:15 TIC [Technical Information Center] 見学
- 14:45 図書館見学（-16:00）



サウジアラムコ本社（右上）  
建設中のキング・アブドゥルアジズ世界文化センター（左下）サウジアラムコ本社でのミーティング（右下）

■二日目 2015年3月24日(火)

10:00 ダンマーム発 12:25 ジェッダ着

18:30 オールド・ジェッダ (Old Jeddah)、ナスィーフ・  
ハウス (Naseef House)、スーク見学

※河田理事：マッカへ小巡礼 (19:00-27:00)

くわしくはp12～15の「事前調査番外編—マッカ  
小巡礼行—」を参照

■三日目 2015年3月25日(水)

09:00 ジェッダ発

10:00 ワーディ・ファーティマ、ジウム社会開発  
センター着

11:00 シンポジウム (縄田・片倉：パネリスト参加)

11:45 センター見学 (常設部門、女性専用部門)

13:00 イードさん宅 (片倉もとこホームステイ先) 訪問

13:45 男性) ゼイニーさん農園見学

女性) ラフマさん (片倉もとこ旧友) ご自宅訪問

16:30 ジェッダ着

19:30 ダーラト・サフェヤ・ビンザグル見学

21:30 サーレハさん (アブドゥルラヒーム夫人)

実家訪問、夕食歓談



オールド・ジェッダ (上)  
ナスィーフ・ハウス (下)



ワーディ・ファーティマ、ジウム社会開発センター (左上), シンポジウムの様子 (右上)  
ナツメヤシ農園 (左下), ポンプ井戸 (右下)

■四日目 2015年3月26日(木)

08:30 ジェッダ発

09:30 イードさん宅再訪

男性) イードさんと懇談

女性) イードさん女性家族と懇談

10:45 旧井戸の位置確認、農園・ポンプ汲上井戸見学

13:20 ジェッダ着

15:00 日本総領事館表敬(山口 又宏総領事)

■五日目 2015年3月27日(金)

07:00 ジェッダ発

09:00 リヤド市内観光

16:00 ハナーン・アルアフマディさん

(Majlis el-Shura 議員) ご自宅訪問、夕食歓談

■六日目 2015年3月28日(土)

09:30 ダライーヤ(Deryah)市見学

13:00 昼食、ワーファ・トワイジリー教授と懇談

15:00 ナーイフ・アルファハディさん(Majlis el-Shura  
議員・弁護士)と懇談

(ヒルトン・ガーデンイン・オラヤ)

19:30 高橋克彦 在リヤド大使館臨時代理大使/公使

との会食・懇談(ファイサリヤ・タワー)

■七日目 2015年3月29日(日)

04:05 リヤド発

05:25 ドーハ着

07:20 ドーハ発

22:45 羽田着



ジェッダ日本総領事館山口又宏総領事と共に



空から見た、雨上がりのリヤド近くの村落

## ワーディ・ファートゥマ再調査への手がかり

片倉 邦雄

2015年3月、片倉もとこ記念沙漠文化財団発足後初めて、ワーディ・ファートゥマを中心に1960年後半から70年初頭にかけて文化人類学者片倉もとこが行った先駆的フィールドワークをフォローアップするため、事前調査団が派遣された。今次調査団は、男性2名、女性4名の編成。中東・アフリカ地域で沙漠文化調査の実績がある縄田浩志教授(秋田大学)が団長を務めた。女性を主体とする貴重な現地人脈をたどれるのは女性だけだということで、参加者の半分以上は女性となった。私は半世紀前の「ワーディの昔」を知る唯一の生き証人、そして「添乗員・浦島太郎」として参加した。

以上の進展の背景として、財団発足以降のこれまでの動きを振り返ってみたい。

2013年2月相棒のもとこが旅立ち、その遺志で同年11月、「片倉もとこ記念沙漠文化財団」が設立された。さらに翌年アラムコ・アジア・ジャパン(AAJ)社から、もとこのサウジ遊牧民の現地調査をフォローアップするため同財団に対し寛大な寄付が寄せられた。2014年2月、財団の発足式典のため、もとこのフィールドワークを当初から支援してくれた当時のワーディ・ファートゥマ社会開発センター所長アブドゥルラヒーム・アルアフマディ氏が、息女でサウジ王国初の女性勅任国会議員のハナーンさん夫妻

## 半世紀後のワーディ・ファータマ

とともに来日、当時おりしもサリマーン皇太子（現国王）来日中でもあり、歓迎ムードは盛り上がった。

その後、アブドゥルラヒームさんの熱意あるご招待、サウジ社会関係省からのマッカ州出先支部への事前指示、さらにAAJ社からの好意あるご手配により、ワーディ・ファータマ事前調査が企画・実施された。現地では、アブドゥル・ラティーフ・ジャミール社長自らのお計らいで車を提供して頂いた。

\* \* \* \*

ほぼ半世紀を経て私が訪れたワーディの現場で目にとめた風景の中で最も印象的なものは、ナツメヤシの葉陰を通して遙か「ジャバル・シドル」（アカシアの山）を望むところに古井戸の跡が残っていたこと…その昔、フィールドワーク最中のもところが照りつける沙漠の太陽の下、この井戸辺に立ち、半定着村の若い男女が車釣瓶で水を汲み容器を頭に載せて家に運んでいく姿を撮影していたところである。彼女はこの井戸端が閉鎖的村落社会で唯一の「お見合いの場所」だと記している。

当時、夫の私は、運転手として、たまには撮影者として、大使館のあった紅海沿岸の巡礼都市ジェッダから40キロ離れたこの水源地帯ワーディ・ファータマに、沙漠の道を何度も四輪駆動車が座礁するのを覚悟でやってきた。まだ調査村の手がかりも掴めない当初、羊の群を追って移動している遊牧民の女の子に目を付けたもところが車を止め真っ黒なアバーヤをかぶったまま、少なくとも挨拶を交わそうと近づいたところ、先方は怪しい相手と疑って、灌木の間にしゃがんだ瞬間立ち上がり、掴んだ砂を煙幕のようにまき散らすという場面もあったことを思い出した。そのころ、悪くすると、片道3時間もかかったが、今や、片側3車線のハイウェイを一時間足らず、あっという間にやってきた。記憶をたどってみると、当時この井戸の周りには、棘の灌木サラムに群がるヤギ、ヒツジたちと黒いアバーヤ姿の遊牧民女性、沙漠の風が吹き、この群れが動くたびに赤、緑など原色のドレスの裾の乱れが見える…そして遠くを見渡せば、まちがいなく涸谷を移動するラクダの群が見られた。でも、今やそれも見られない。

\* \* \* \*

以上述べたように、道路網の拡充、住居形態の変遷に加えて、かつて近隣都市ジェッダへの飲料水の重要な供給源であったこの地域は、いまや逆にジェッダから海水淡水化の恩恵を受けていることが判明した。各家庭で蛇口を捻れば飲料水がざっと出てくる。このワーディに近代化、都市化の波が押し寄せ、パイプによる水供給などインフラ整備によって生活は全般的に便利になったといえる。

しかし一方で、失った、あるいは失いつつあるものはな

いのであろうか。教育水準向上に伴って、若者は就職のため近隣都市に吸収されていく。昔のような三世代、四世代家族は少なくなった。現地社会開発センターが催してくれた歓迎シンポジウムの機会に、最近「核家族化」がみられるのではないかと質問してみたが、はっきりした答えは返ってこなかった。

もところが遺したフィールド・ノートは、イスラーム社会特有の生活のリズム、礼拝、断食、巡礼などをつぶさに記録しているが、さらに「沙漠文化」の重要な要素というべき「ラーハ」の世界を垣間見ている。もところはこれを、「ゆとり」+「くつろぎ」-「りくつ」=「ゆとろぎ」という造語をもって表現した。「人を殺す」太陽が沈んだ後、沙漠の涼風を求めて三々五々村人が集まり、たき火を囲んで、歌をうたい踊り、即興詩を披露しあい、談笑する…この世界に、もところは沙漠文化の真髄を見たのである。また、かつて職場をともにした国立民族学博物館の小長谷有紀教授は、もところの『移動文化考』について「動くことによって清められるという生活倫理は、モンゴル遊牧民にも…通ずるところがある。グローバル化のすすむ現代には、ますます必要となる感性であるように思われる」（『毎日新聞』2013年5月20日朝刊）と述べている。

\* \* \* \*

前述のアブドゥルラヒーム氏は、昨年春、沙漠文化財団発足の式典から帰国して直ちに印象記を地元メディアに投稿した。終始一貫して応援したもところのフィールドワークを回想するとともに、「日本の研究者たちが、一万キロも離れた、しかも沙漠文化には程遠い湿潤な文化環境の中で、地元のわれわれが圧倒的な石油文明の中でほぼ忘れかけているアラブの伝統と文化をこんなに熱心に追究しようとするのは誠に新鮮な驚きだった」と述懐している。

当地域では、もところが1969～71年当時、地形、水利、土地所有、部族・支族関係、生老病死の営為などを現地調査して以来、同じ分野での追跡調査は



イード氏らに古い写真（片倉もところ調査時）をみってもらう

## 半世紀後のワーディ・ファーティマ



「アラブ流」女子会に参加するため  
ラフマ氏宅へ入る女性団員たち

まったく行われていないようである。“Bedouin Village”は「古典的」先行研究として留まっている。ただ、このたび入手した資料によれば、その他の分野、考古学・土木建築学的調査がそれぞれ専門家グループによってある程度行われ、それらの総括として、牧草地の減少、汚水溝の不備、ごみ投棄などに係わる砂漠化の進行、環境劣化現象が指摘されている。今後、日本研究者による同地域に対するフォ

ロウ・アップ調査にはよい参考となる。

\* \* \* \*

この世界では、われわれ男性は一つしか目がない。女性は三つ目がある。なぜって？男性は家に入ったらその瞬間から男専用の客間に隔離される。アラブ流「女子会」からは締め出されてしまう。そして日本人女性は男性のサロンに出入りできるから。あとから聞いた話では、女性団員は奥の間で早速黒いベールを取り外し、この家の女性たちから、アラビア・コーヒーとナツメヤシの接待を受けた。さんざめく笑顔。80歳代の女長老は、半世紀前生活を共にしたもとこのことを懐かしそうに語り、出身部族特有の伝統衣装、マリア・テレジア銀貨などのついた飾面（ブルグア）を慣れた手つきで着けてみせたとのこと。太鼓をたたくや踊れやの即席ショーで大歓迎してくれたらしい。

窓越しに、近くはナツメヤシの太い幹と葉陰、そして遙かにシドル山が、50年昔にこのワーディ・ファーティマに潜り込んだ「一風変わった日本人の女の子」を思い出しているようであった。（文：片倉邦雄）

## ● 沙漠に生きる人びと

吹田 靖子

2013年、片倉もとこが逝ってしまってから、“Bedouin Village”を初めて手にした。『アラビア・ノート』以降の彼女の著書はほとんどオンタイムで読んでいたが、英語で書かれ、コロンビア大学中東研究所の基金で東京大学出版会から1977年に出版されていたこの本を読んで、文化人類学者としての彼女の真髄に触れた思いがした。60年代の終りから、70年代初頭にかけて、サウジアラビアのワーディ・ファーティマで、こんなに精緻に対象を見詰め、誠実に言葉を紡いでいたのだ。その緊張感に満ちたまっすぐな探究心がびんびん伝わってきた。

そして、私の中に生じた最大の疑問は、1950年以降60年代にかけて、イギリス、イタリア、オーストリア等の企業がこぞってジェッダ、マッカなどへ向け送水管を敷設したと、この調査から報告されているけれど、50年近くたった今、ワーディ・ファーティマはどうなっているのだろうか？だった。

2014年2月、その遺言によって設立された「片倉もと

こ記念沙漠文化財団」の設立披露パーティがあり、サウジからアブドウルラヒーム氏と長女ハナーンさんご夫妻が来日された。

アブドウルラヒーム氏は50年前、現地の社会開発センターの所長として何かと片倉もとこの力になってくださった方、ハナーンさんは当時ほとんど赤ん坊と言っていっくらの幼子だったが、今、なんとサウジアラビア初の女性国会議員である。ご家族そろっては初めての日本、短い滞在だったが、関係者は感無量だった。

ほどなく秋になり、アラムコ・アジア・ジャパン社から財団に対し、多大な寄付金をいただくことになり、どんな事業を行うかが討議された。私の関心は、「50年後のワーディ・ファーティマ」だった。

2015年、この調査を実現するために、まずは現地の状況を確認し準備を進めるための予備調査を行うことになった。片倉邦雄評議員会議長、縄田団長以下女性4名の総勢6名、その中に私も参加させていただくことにした。50



## 沙漠に生きる人びと

年前、片倉もとこがその第一歩を記した地に、自分で立ち、触れたい、確認したいと願ったのだ。

パスポートを用意し、ヴィザの申請その他進められていく中、まず驚いたのは現在、サウジアラビアは観光ヴィザを発給しておらず、物見遊山の旅行者は不要なのである。襟を正し、アバーヤなども整え、いささか緊張して旅立った。

最初の訪問地はダハラーン、サウジアラムコ本社に表敬訪問し、建設中のキング・アブドゥルアジズ世界文化センターについてのお話を伺った。来年末には完成とのことだが、世界のどこにおいても通用しそうな、ある意味、未来都市のように見えた。この敷地内では女性の運転OK、服装も様々で解放感と活気にあふれている。

翌日ジェッダに飛び、2日間にわたり、ワーディ・ファーティマに行くことができた。ワーディ・ファーティマの町にある社会開発センターへ表敬訪問。最近建て替えられたモダンな建物の中にいろいろな施設が備えられ、地域の人々の暮らしを支援する姿勢が強く感じられた。男性、女性に分かれてそれぞれご案内いただきランチの後、いよいよワーディ・ファーティマの村落へ。

まず片倉もとこがフィールドワークを行なったとき、ホームステイさせていただいたイード家を訪ねた。もとこが滞在した時からは建て替えられたそうだが、同じ位置に目の前にシドル山と対峙して立っていた。「Mokoはおばあちゃんと一緒にこの玄関脇の部屋で寝起きしていたのです。そのおばあちゃんも3年前になくなりましたが。」と、

イード氏が話してくださった。サロンにお茶が用意されみんなでお話を伺った。

イード氏のほかに、もとこをよく知っているという部族の長老に当たる人たちも同席され思い出話に花が咲いた。岩山ともいうべきシドル山を見ながら、もとこが、広島と長崎の失われた緑を語ったのです、とも話して下さった。

「あの頃は、夜ここでお茶を飲みながら情報交換したものだ。でもいま、若い人達はジェットへ行ったりしてそんな機会もない。さびしいことだ」という言葉は胸に染みだ。ややあって思い切って質問してみた。

筆者 「今、ワーディ・ファーティマの水はどうなっているのでしょうか？」

部族長「水は30メートル、いや100メートル掘ってやっと少々出るくらいですよ。」

筆者 「この地域の飲料水は？」

部族長「ジェッダにある飲料供給会社からパイプで引いて買っている。蛇口をひねれば水は出ます。」

あれからずーっと心から離れなかった心配事は、無用のものであった。

イード氏の奥様の妹の娘さんと、3人の子供を抱えてイード家に同居しているイマーンさんの話は別室で女性だけで伺った。38歳、3年前、夫が急死し、学校で英語教師をしながら子供を育てているという。



かつて使われていた井戸の前にて  
うしろに見えるのはジャバル・シドル（アカシアの山）

## 沙漠に生きる人びと

そのあと女性陣は、もとこをよく覚えているという90歳を超えた長寿女性、ラフマさんの家を訪ねた。体調が良くないと聞いていたので心配していたのだが、顔を合わせると久しぶりに見る日本人に大喜びして下さり、Moko, Moko と本当にうれしそうだった。アラビア語しか話せない方でコミュニケーションには苦勞したけれど、タベラを打ち鳴らし、歌を唄い、孫たちにダンスを踊らせて歓迎して下さった。昔の風俗が話題になると、古いブルグアを持ってこさせ慣れた手つきでひもを結び、さっさと着替えて見せて下さった。体調が悪いと言っておられたのはどこへやら、若い女性たちにはまねのできない手際の良さで、みんなびっくりして眺めていた。ラフマさんにとっては、その昔、東洋から突然現れたもとは今も心に深く残る懐かしい存在なのだろうと思われた。

ジェッダへ戻って、もともと親しかった美術家、サフエヤ・ビンザグルさんの館、美術館を訪ねた。ほぼ同年代のサフエヤさんはジェッダの富裕なファミリーに生まれ、エジプト、ロンドンで教育を受け、30年以上にわたり、人々の暮らし、風俗、風景、などを描き続けてきた。写真のないこの国で、今や彼女の作品は貴重な資料ともなっている。また各部族の貴重な衣装なども収集されており、その数は300点以上にも上る。彼女の美術館では常設で作品展示を行っているほか、子供のための美術教室、美術講演会など、さまざまな活動を行っている。サウジアラビアに触れる機会の少ない私たちでも、彼女の作品、彼女の仕事に触れることで、サウジアラビアを知ることができる、理解につながるのでは、と思った。もとはサフエヤさんとそんな話をしていなかっただろうか。

一週間の滞在中に2度自宅での夕食にお招きいただいた。一度目はジェッダで、アブドウルラヒームさんの奥様、サーレハさんの実家にお呼ばれした。家中でいちばん大きな部屋の床に食事用のクロスが広げられ、そこに食器、取り皿、料理が次々と並べられる。その夜のごちそうは、仔羊のミルク煮だった。生後3カ月、まだミルクしか口にしていない仔羊を今夜のためにおとし、白い米のミルク粥と長時間煮こんだもの。大きなホーローの深皿に見事に盛り付けられて出てきた。話にきいたことのあるこの料理がこんなに美味しいものであることに、びっくり。目玉も脳もみなさんしっかり召し上がった。準備をしたのはサーレハさんの甥たち、みんなごく近くに住んでいるようだ。サーレハさんのお母様は90歳を超えてかくしゃくとしておられ、サーレハさんの妹さん家族とこの家に同居されているようで、この夜も食事と一緒にしっかり召し上がっていた。仕事を終えて帰宅した若い人たちが次々と食事の輪に加わり、当方の一行6人を加えると総勢40名はゆうに超えて

いただろう。レモン水にリンゴ、オレンジなど果物の薄切りをたっぷり浮かべ、ミントの葉をきかせたサウジジャンパンがさわやかだった。

リヤドではハナーンさんのお家にお招きいただいた。公務で忙しい合間をぬってのお心づくしである。こちらはプールサイドに大きなテーブルをしつらえて、パーベキューをメインにビュッフェ。温かなもの、冷たいもの、新鮮な野菜に手製のペッタンコパン、美味しいアラビアコーヒー。お庭は、割合高い塀でしっかり取り囲まれ、外からは全く見えない。大きな月が真上から、煌々と照らしていた。この夜は、アブドウルラヒームさんのお母様がやはり90歳を超えておられるのだが、ご出席、ハナーンさんの祖母である。アブドウルラヒームさんご夫妻、ハナーンさんご夫妻に二人の息子さん、弟さんたちとその家族、そしてあすはロンドンに出発するという妹のウィジュダーンさん、我々一行を加えると30人にはなっていただろう。みんな心からくつろいで楽しんだ。

この二つの食事のとき、家族以外の人を私は見かけなかった。準備、調理、そして食卓でのサービスはほとんど男性によって行われていた。こんな大家族で食事を、それも外国人を招いてする家庭が日本に今あるかしら、とつくづく考えてしまった。沙漠という過酷な環境で生きるすべとして、そこでは自分を裸にして晒せる、大きな屋根が、大家族主義が脈々とつながっているのを感じた。もとは、沙漠文化とこだわり続けた源泉は、そこから見えてくるのではと思ったりした。

今回、サウジアラビアへの旅を経験して、ただ一つ残念に思ったことがある。沙漠のゴミだ。

ダンマームに到着して、空港から市内に向かうとき、うん？と思ったのはそれだった。沙漠というより荒野と呼びたい野に、古タイヤや大きな白いゴミ、(おそらくはプラスチックなど自然に腐敗しないものだろう)が、点々と目立つ。これはジェッダからワーディ・ファーティマへ向かうハイウェイの両側も同様であった。また、ワーディ＝涸川の堤防というべきところはゴミの堆積物で成立しているといえそうに見えた。なんとも胸が痛くなった。沙漠にゴミは不要。沙漠は沙漠であってほしい。どうしたらいいのだろう。

ゴミは人間の仕業。次に沙漠に立つときには、解決され消え去っていることを祈る。

(文：吹田靖子)

「違う。やはり、ここは沙漠ではない」

初めてこの地に降りたとき、そう思った。片倉もとこ教授の資料から推察はしていたが、やはり沙漠ではなく、ところどころに草木の生えている土漠だ。つまり、地下のどこかにその水脈を隠しているオアシスである。

私が所属する早稲田大学国際情報通信研究センター・サウジプロジェクトでは、5年越しの努力が実り KACST (キング・アブドゥルアジズ科学技術シティ、サウジ) との共同研究契約がまとまった。研究目的は「ナツメヤシの効率的栽培」、害虫被害で内部が腐ったナツメヤシをいかに迅速に見つけるかである。現在、レーダーを使用して水分が少ない個体を瞬時に見分ける技術を開発している。

すっかり干上がった井戸を見つめながら私は考えた。水はどこに行ったのか？地球上の水がすっかり干上がることはない。目の前にあった水が消えたのなら、他に移動しただけのことだ。もっと深くに潜ったのか、あるいは流れが変わったのか。だとしたら、この技術を使ってヘリコプターで空から眺めれば、水の在り処はある程度わかるはずではないか。レーダーが戻る時間の僅差が、水の場所を教えてくれるはずである・・・。

実は、ワーディ・ファティマに足を踏み入れるにあたり、私なりに立てていたテーマが3つある。ひとつは、冒頭に挙げた「水」、2つ目は「住居」、3つめは「伝統衣装」である。

住居というテーマについては在りし日のもとこ教授から「あなたに手伝ってもらいたいことがあるのよ。沙漠の住居形態の変遷研究」

と言われたことが忘れられないからだ。おそらく、私の専門が建築・住居室内装飾だからであろう。ぜひそのうちに、と言っているあいだに時が経ってしまったことは、後悔してもしきれない。

しかし、現地を見て落胆した。典型的な遊牧もしくは半定住型住居は、すでにワーディ・ファティマのどこにも見られなかったのだ。むしろ、もとこ教授が見た当時の住居形態は、マグリブ地域やシリア、イランでこそ今も見られる。なるほど、過去の文化は周辺に残るのかもしれない。そういえば、かつて訪れたサウジ東部の町アルハッサには、若干残っていた記憶がある。

さて、3つめのテーマは「伝統衣装」だ。伝統衣装を大規模に展示公開しているサフェヤ・ビンザグル女史のコレ

クションは8年前すでに拝見していたが、刺繍技術の継続性については確実な足取りをつかめられずにいた。しかし最近、マンソージャットというボランティア団体が、失われかけた技術を復興させる活動を始めている事実を知った。

かつて、アブハー地方では大胆な花柄のパンタレットやサロン、麦わら帽子を身に着けた女性が見られ、タイーフ周辺のバニ・サード族女性は鉛ビーズをふんだんに使用した幾何学柄刺繍、赤い房の頭飾りを身につけていたというが、今やサウジ人でもその事実をほとんど知らないそうだ。当財団がお世話になったハナーン国会議員によると、ネットで彼女が片倉もとこ撮影の民族衣装やブルグアを紹介したところ、

「こんな服装をした人たちがかつて自国にいたなんて、驚きだ」

「信じられない。本当のことか？」

と、大変な反響があったそうだ。急速に「住」のみならず「衣」の伝統文化が失われていることはまぎれもない事実だろう。

ところで、ビンザグル女史の展示物の中に、もとこ教授も見たであろうヒジャーズのスライム族、ハーブ族の衣装も紹介されていた。この二つは縁続きにあたる部族ではあるが、まったく異なる衣装を身に着けていたという記録も見つけた。英国人旅行者チャールズ・ダウティーが書き残した「赤い糸で刺繍をほどこした青いキャラコドレス」とは、まさにハーブ族の衣装のことだったのであるまいか。インディゴブルー、パッチワーク、ボタンと刺繍の組み合わせはハーブ族衣装の特徴である。

サウジアラビアの伝統衣装や刺繍について、過去の文献はほとんど残っていない。織物と刺繍の国際的権威シーラ・ペインが著書『刺繍織物：五大陸の伝統的デザイン』の中でサウジについて触れているのはたった1行で、しかも「ごくわずかに刺繍がほどこされた黒布」と表現している。実際には、部族ごとに工夫を凝らした明るい色の糸が全体の6割以上にふんだんに刺繍されているのに、である。

ところで、ひとつのエピソードを思い出した。あるサウジ女性が保管してあった伝統衣装を私に披露してくれる際、布をゆするようになると、乾燥スイートバジルの小枝がカサカサと音を立てて床に落ちたのだ。防虫用として、衣類の間にしのばせていたものである。

## 3つの宿題・・・ワーディ・ファーマを訪ねて

「こうゆう知恵を、今の女性は知らないのよ」  
先人の知恵は、これからも引き継がれてゆくのだろう  
か・・・。

多様な伝統的刺繍技術と柄やスタイル、その復活に熱意  
を注ぐボランティア団体マンソージャットと、次の機会に

は接触し、より詳細を調べてみたい。  
もとこ教授が残された宿題はますます大きく、輝いていく。  
(文：郡司みさお)

### 事前現地調査番外編 —マッカ小巡礼行—

河田 尚子

このたびのワーディ・ファーマ事前調査のメンバー  
に選んでいただいた時、私の頭に真っ先に浮かんだのは大  
変不謹慎ながら「マッカに行けるかも」という思いであっ  
た。イスラームに入信して18年、いまだに一度もマッカ  
はおろか、アラビア半島に足を踏み入れたこともない。サ  
ウジアラビアに行けるというだけでもありがたいことだっ  
たが、せっかくマッカのすぐそばまで行くのだから、でき  
ることなら聖地マッカを訪れ、カアバ聖殿を拝みたいとい  
うのはイスラーム教徒として自然な気持ちであった。とはい  
え、今回の調査は期間が短く、スケジュールもぎっしり  
であり、とてもそんな余裕があるとは思えない。まさに「イン  
シャーアッラー、アッラーの思し召しならば。」しかし  
ただ手をこまねいては思し召しもいただけない。日本  
ムスリム協会にムスリム証明書を出してもらい、財団メン  
バーの方々には「小巡礼をしたい」とそれとなくアピール  
し、巡礼のやり方を勉強し、たまたまジェッダに里帰り中  
のサウジ人留学生に連絡をとるなど、できる限りの準備は  
していった。これで出来なければ、アッラーがお望みでは  
なかったのだとあきらめがつく。

サウジアラビア滞在2日目、ジェッダのホテルでアブ  
ドゥルラヒーム氏と合流した。スパイス香るアラブコー  
ヒーを飲みながらくつろいでいると、片倉邦雄評議員会議  
長が、「彼女はムスリマだから、何とか滞在中にマッカに  
行けないものだろうか」と言ってくれた。するとアブ  
ドゥルラヒーム氏はこともなげに、「私の妻に頼めばいい、  
今日これから行きなさい」と言って下さった。後から到着  
されたアブドゥルラヒーム夫人も、まったく驚く様子もな  
く、「それじゃあ、英語のできる姉に連絡するわ」と携帯  
で電話をし始めた。あれよあれよという間に話が決まり、  
調査団の他のメンバーがジェッダ市内観光をしている間  
に、信徒あこがれの聖地マッカに行けることとなった。こ  
れこそまさしく「移動文化」。片倉もこの本の中で親し

んでいた、予定は未定、変化する状況に臨機応変に対応す  
るアラブ人の柔軟性を、身をもって体験させてもらうこと  
ができた。

アブドゥルラヒーム夫人、連絡を受けてかけつけて下  
さった夫人のお姉さんのドクトゥーラ（女医さんとのこと  
で、尊敬をこめてこう呼んでいた）、運転手のムハンマド  
さんとともに、夜のハイウェイを2時間半ほど飛ばして  
マッカに向かった。マッカの町に近づくと、ハイウェイ  
の上にコーランを置く台を模した巨大な建造物が覆いかぶ  
さっているのが見えてくる。マッカは異教徒立ち入り禁止  
の聖地であり、本来はここでムスリムであるかどうかの検  
問があるはずなのだが、車は全くスピードを緩める気配も  
なく、そのままマッカの町に吸い込まれていく。『イスラ  
ームの日常世界』に掲載されている、「イスラーム教徒以外  
立ち入り禁止」の看板を目にすることもできなかった。

そのころから雨がぱらぱらと降ってくる。到着したマッ  
カの町は、坂道に急流のような水が流れていて、平地にも  
大きな水たまりがあちこちにできていた。たまに雨が降っ  
たらいつもこんな感じになるのだそうだ。長いアパーヤを  
着ているので足元には気を付けなければならなかったが、  
空気はさわやかで、予想していたよりもずっと涼しい。

メッカの町中は高層ホテルやショッピングセンターが立  
ち並び、当然のことながら、預言者ムハンマドが生きてお  
られたイスラーム初期の時代をしのぶよすがは全くない。  
つい最近、世界で最も高い時計台が完成したということで、  
ドクトゥーラたちは、「ロンドンのビッグベンよりも高い  
のよ」と誇らしげだった。夜になってもにぎやかな通りを  
抜けると、カアバのあるマスジド・ハラーム（聖モスク）  
の前に出た。

カアバというのは「立方体」という意味で、黒い布で覆  
われた石造りの建物である。その周囲を、巨大な「マスジ  
ド・ハラーム」が取り囲んでいる。その上に煌々と照明が



夜も明るい Masjid・ハラームの入り口前で

灯り、いくつものクレーンが林立していることに驚いた。1980年代、ファハド国王の時代から、Masjid・ハラームは、増え続ける巡礼者を迎え入れるために、拡張に拡張を続けているのだ。

イスラーム教徒の義務である大巡礼・ハッジは、イスラーム暦の12月でなければならない。それ以外の季節に行くのは小巡礼、ウムラと呼ばれ、これは義務ではない。しかしそれでも、Masjidの中は世界中からやってきた大勢のムスリムでごったがえしている。日本人が考える「聖地」とはまったく異なる、何か異様な熱気があたりにみなぎっていた。

慣れた足取りの夫人とドクトゥーラの後について Masjidの中の人混みを通り抜け、あっけないほどすぐにカアバ聖殿の前に出た。ハッジの時ならおそらくとうてい近づけないような至近距離だ。初めてカアバを目の前にした気持ちを何と表現したものか。圧倒的な感動、と言いたいところだが、実は「こんなに簡単にカアバの前に来てしまったのか」という拍子抜けのような気持ちであった。ただ、暗い夜空に黒いカアバが溶け込むようで、周囲の喧騒もその前では消えてしまうような、何か静謐で高貴な存在感があった。

感慨にふける暇もなく、ドクトゥーラにうながされてカアバの周りを反時計まわりに7周する「タワーフ」(周礼)の行に取り掛かった。ドゥアー(祈願)やズィクル(アッラーを讃える言葉を繰り返し唱えること)などを口にしながら、夢中で回る。団体で固まって回っている人たちもたくさんいる中、ドクトゥーラは、「とにかくカアバに近づきなさい」

と、ぐいぐい奥へ押し込んでくれる。大巡礼の時、同じようにカアバに近づこうとして、危うく圧死するところだった、という人の話を聞いたが、幸いそんなこともなく、カアバに触れることもできそうなほどに近づくことができた。周囲の人たちの中には、いかにも幸せそうに、法悦の表情を浮かべる人がいる。扉の部分などにすがって泣いている人の姿も見える。しかし、私にはとりすがるところか、カアバに触れる勇気さえ出なかった。アッラーの思召しでここまで来たものの、カアバの超然とした高貴さに、私にはまだカアバに触れる資格はないのではないか、という思いにかられてしまった。

タワーフが終わると、休む間もなくサファーとマルワの丘を7回行き来する「サアイ」(走礼)の行に向かう。片道を一回と数えるので、往復では3回半である。この行は、預言者イブラーヒーム(旧約聖書のアブラハム)が、アッラーのご命令に従って、妻ハージャルと息子イスマーイルを沙漠の中に置き去りにしたとき、のどの渇きに泣き叫ぶ息子のために、ハージャルが水を求めて二つの丘の間を行ったり来たりした故事によるという。絶望したハージャルが息子のもとに戻ってくると、息子の足元に水がこんこんと湧き出していたという。この湧き水は「ザムザムの泉」と呼ばれ、この周辺に人が集まってきてマッカの町が発展したと言われている。

サファーとマルワの丘は、今では Masjid・ハラームの建物の中に組み込まれていて、屋根に覆われ、二つの丘もてっぺんしか見ることができない。往復する場所も整備され、廊下のようになっていて、「丘の間を行き来している」

## マッカ小巡礼行

という感じは全くない。砂ならぬ、大理石が敷きつめられていて、裸足の足の裏にひんやりと心地いい。

二つの丘の間はけっこうな距離があるので、高齢のアブドゥルラヒーム夫人とドクトゥーラは車いすで往復するという。巡礼省に雇われた若者が車いすを押してくれるのだそう。あなたもどう、と言っていたが、せっかく初めての巡礼なのだから自分で走りたい。はぐれてはいけないので、車いすに乗ったドクトゥーラと手を握って走り始めた。

ところが、これがなかなか大変。自分の足で往復する人たち、特に女性たちは、マイペースでゆっくりと歩いている。しかし、車いすを押す若者たちは、その人たちを「どけどけ」とばかりに押しつけて全速力で走っていく。それについていだけで精一杯。のんびりとおしゃべりしながら歩く人たちを横目で見ながら必死で走る。サアイの間はアッラーにたくさんお祈りをし、自分の心の卑しさや貧しさを意識し、魂が清められるようアッラーにお願いするように、と事前に読んだ巡礼ガイドブックには書いてあったが、そんな余裕はとてもない。日本の家族や友人たち、知り合いたちのための祈願をするのが精一杯だ。ただ、屋根があって涼しい夜でもこんなに大変なのだから、息子の命を心配しながら水を探し求めたハージャルはどんなにかつらかっただろう、と実感はできた。

ようやくサアイを終えて、カアバの見えるマスジドの回廊で礼拝し、しばらくの間休憩する。回廊にはザムザムの泉の水が水道で引かれていて、たくさんある蛇口をひねればいくらかでも水が出てくる。水を見出した時のハージャルの気持ちを思いながら、冷えた水をいただいた。ザムザムの泉そのものに近づくことはできなかった。かつては泉まで行って水を飲むことができたそうだが、今ではそんなことをしたら人が殺到してとても危険なことになってしまうだろう。巡礼のお土産によくザムザムの水をいただくが、これも最近では汲んでいい量が制限されるようになったという。

礼拝を終えて座り込むと、カアバの黒い姿が見えた。しかし、残念ながらそこからは、カアバの全体像を見ることができない。というのは、大巡礼の際にはタワーフをするためのスペースが足りないため、カアバを取り巻く回廊が2階、3階と建て増しされ、視界をさえぎってしまっているのだ。

その後、まだ晩御飯を食べていなかった私たちは、マスジド前の広場の一角に座って、ドクトゥーラが買ってきてくださったサンドイッチをばくついた。真夜中を過ぎているのに、広場には大勢の人たちが行きかい、ショッピングセンターのエスカレーターを上り下りする人波も絶えな

い。ウムラでこれなら、ハッジの時はどんなにすごい人出になるのだろう。

ドクトゥーラと夫人から、「初めてウムラに来て感想はどう？」と聞かれたが、「感激です、信じられない」という平凡な言葉しか出てこなかった。深い宗教的感動とか、熱い信仰心が湧き上がってくるとか、アッラーを間近に感じたとか、そういう感慨はなく、ただただ、初めてのウムラを果たしたことにほっとしていた。

ようやくホテルに帰り着いたのは夜中の3時。初めてのメッカ巡礼について思いをいたす余裕もなく、ベッドにもぐりこんだ。

翌日は朝からワーディ・ファーティマ調査が始まり、この日も巡礼について深く考える余裕がなかった。しかし調査二日目、イード氏のご自分の畑に私たちを連れて行って下さったとき、何気なく「これは預言者ムハンマドさまが良く眠れるように体にすりこんでいたんだよ」と、白い実のついた植物を渡してくれた。それがまるでつい最近のことであるかのような何気なさで、いきなり預言者さまが身近に感じられた。また、聖典クルアーンの中に、楽園のそばにある「とげのないスィドラの木」が出てくるが、これもワーディ・ファーティマ近辺で普通に見ることができるクロウメドキ科ナツメ属の植物だということを、縄田団長の解説で知ることができた。後で調べてみると、Bedouin Village の中でも、「ワーディ・ファーティマにたくさんある背の高い木」として紹介されている。もちろん、クルアーンの中に出てくるスィドラは、預言者さまの言行録『ハディース』によれば、「その果実は壺のよう、その葉は象の耳ほどの大きさ」で、四つの川がその根元から流れている、という天国の至福を象徴する聖なる木で、現実のスィドラとは別物ではあるのだろうけれども、そのもとになっているのが、乾燥した大地に生えている、当時の人々にとっては貴重な植物のひとつであっただろうことに感銘を受けた。ワーディ・ファーティマも、きらびやかに変身したマッカほどではないが、片倉もこの調査当時とはすっかり変わり、近代化されている。しかし、1400年以上前、預言者さまが生活していた時代と変わらない部分もちゃんと残っているのだと実感させられた。

それとともに、ウムラの間はどこかよそよそしく感じられたカアバが、しだいに私の心の中で近いものになっていった。日本に帰ってからも、私のおなかの中にカアバが常に存在しているのである。もうちょっときれいに、「心の中に存在している」とでも言えれば恰好いいのだが、「心の中にいる」というのとは何かちょっと違う。その存在が感じられるのは、どういうわけか、おへそのちょっと下あたり、東洋医学で言う「丹田」のあたりなのだ。だからといっ

て、一気に信仰心が深まるとか、良いムスリムになれたというわけではない。私自身は相変わらず中途半端な信徒でしかない。ただ、いつもカアバと一緒にいるというこの感じは、これまで経験したことのないものだ。ウムラに行つて、実際にカアバの前に立たなければ得られない感覚だろうと思う。

ウムラとワーディ・ファーティマ調査の経験は、私の中ではまだまだ未消化のまま。まだもう少し、巡礼の体験の文章などを読んで、巡礼についてもイスラームのふるさどについても考えていきたいと思っている。

(文：河田 尚子)

## ● 片倉もとの視線の先

藤本 悠子

片倉もと先生が最後の著作を口述していたとき、私室の窓から青い空を通じて想いを馳せていた地に、1年後自分が立つことになるとは思ってもみなかった。助手として約7年間、側で学ばせていただいたにもかかわらず、沙漠文化について漠然とした「憧れ」しかもたないで、実際に訪ねてみることは夢のまた夢と、寝かせたままだった。今回財団の事務局秘書として、乾燥地域、しかも片倉もとの研究の原点であったワーディ・ファーティマを訪れる機会を得て、感謝の気持ちとともに、この経験を有意義に次へ繋げていこうという気持ちを新たにしている。

私自身の研究的関心に沿って、サウジアラビアにおける「外国人」と「女性」に焦点をあてて今回の訪問を振り返ってみたい。

### サウジアラビアで「暮らす」外国人

湾岸アラブ諸国は、外国人人口の割合が大変多い「多外国人国家」である（細田尚美編著『湾岸アラブ諸国の移民労働者—「多外国人国家」の出現と生活実態』明石書店、2014年）ことは知識としてあったものの、ダンマーム、ジェッダ、リヤドの各空港でさまざまな人種のグループが悠然と歩いていたり、地べたに座ったりしている様はとても印象的だった。珍しい光景にボーっとしていると、目ざとい荷物運びの男性たちにホイホイスーツケースを運ばれていってしまう。

### ダハラーンで出会ったフィリピン人

ダハラーンのサウジアラムコ本社では、敷地内を女性社員が車を運転し、調査団を案内していただいた。彼女はアラムコに入社してまだ4カ月だというが、父親がサウジ人、母親がフィリピン人で、UAEの大学を卒業後、アメリカで修士号を取得したという若きインテリ女性だった。運転もアメリカで学び、フィリピンは旅行したことはあるが住

んだことはない、と、こともなげに話してくれた。彼女のアイデンティティについて、もっと聞いてみたかった。アラムコからダンマームのホテルに戻る際、ドライバーの男性もフィリピン人だった。彼は母国に家族がいる出稼ぎ労働者で、姉妹が日本にケアギバーとして働きに行っている、と話してくれた。仕事の調子を聞かれて、「いまのところはいい」といった彼の答えには、サウジ人と外国人労働者の関係に対する複雑な想いがにじんでいた。

いまやフィリピン人は、サウジアラビアにとってなくてはならない労働者としての地位を築いているようである。リヤドの病院に勤めているウィジュダーンさんいわく、看護師はほとんどフィリピン人だそうで、「小さくて器用で働き者」と評していた。確かにアフリカの人びとは基本的に大柄でゆったりしている。2011年、サウジはフィリピン人家事労働者の採用停止に踏み切ったが、結局再開したのももっともだと感じた。

### サウジ人の管理のもとで働く外国人

今回食事は、お招きいただいたほかはホテルのレストランで済ませることになったが、野菜が新鮮で種類が多く、「沙漠の国」でこんなにおいしい野菜が食べられるとは、と感動した。サウジアラビアはナツメヤシをはじめとして、トマトやスイカ、キュウリなどを自国で生産しているが、湾岸諸国の中で第2の野菜輸入国でもある。インド、エジプト、ヨルダン、南アフリカが主な輸入先で、この4ヶ国が湾岸諸国の輸入量の半分を占めるともいわれる。（Saudi Gazette "Gulf states import 5 million tons fresh fruit, veg yearly" <http://www.saudigazette.com.sa/index.cfm?method=home.regcon&contentid=20150421241161> 2015年6月30日閲覧）

レストランの従業員は、職種と国籍が一体になっている

## 片倉もとこの視線の先

ことがはっきりとみてとれた。受付で手持無沙汰に鎮座するのはサウジ人、ハキハキと注文をとりにくるのはパキスタン人とネパール人だった。

ワーディ・ファーティマでも同じく、農園を経営するのはサウジ人だが、実際に管理するのはエジプト人やスーダン人だった。縄田団長の話では、ハト小屋の作り方やナツメヤシの育て方にエジプトなどの影響が現れているそうである。



ナツメヤシ農園にあるハト小屋

エジプトの影響は、サウジの文化にも深く及んでいるようだった。「はい」は正則アラビア語で「ナム」だ、となんとか記憶を掘り起こして備えていたのに、ハナーンさんご一家が「アイワッ」と調子よくかけあっているのを見て驚いた。サウジのとくに若者は、エジプトの映画や音楽が大好きなのだそう。ウィジュダーンさんはアパーヤの下に、お気に入りのエジプト人女性アーティストの写真が大きくプリントされた緑の衣装をまとっていた。彼女をはじめ、ハナーンさんご一家は、パーティでもリズムカルなエジプトのポップスを大音量で流しながら踊ったり、ドライバー見学のバスの中でも隙あればエジプトで流行っているという歌を歌っていた。そこには厳格なサウジアラビアのイメージとは異なり、映画館の設置が禁じられている国だと思えないような、明るく楽しい雰囲気が満ちていた。

ハナーンさんご自宅のパーティで、片倉もとこ先生の撮影写真をスライドショーでご覧いただくためパソコンと格闘していた私は、ハナーンさんいわく「サイレント・ソルジャー」のようだった。踊ることも気恥ずかしさが勝ってなかなかできず、パーティの最後に「あなたをこれから

『オッタ』と呼ぶわ」と命名され、エジプト方言で「子猫」だとわかったとき、「ジャッハール（子供）はどちらかといえばばかにされる存在」というもとこ先生の文章を思い出して、自分の未熟さを恥ずかしくおもった。しかし、親しみを感じてくださったのだからやはり嬉しかった。パーティの帰り際、二人ほどアジア人らしき女性が奥に控えているのを見た気がした。今回受けたアブドゥルラヒームさんご家族の大変なおもてなしの裏側はどうなっているのか、もとこ先生ならそこにスッと入っていったらどうだろうか。

### サウダイゼーションの様相

サウジアラビアでは、1985年以降、「労働力の自国民化（サウダイゼーション）」を掲げて、国民の失業対策に取り組んできた。（辻上奈美江「深刻な若者の失業—サウダイゼーションは解決策となるか」中村覚篇『サウジアラビアを知るための65章』明石書店、2007年）ワーディ・ファーティマの社会開発センターでも政策の影響か、職員に外国人がほとんど見られなかった。もとこ先生がフィールドワークに入った当初、なかなかアラビア語が通じないなかで、シリア人職員の女性に大変お世話になったという。今回の事前調査でも、もとこ先生のことを知っている方はむずかしいまでも、だいたい英語が通じる職員がいるのでは、と少し期待していたが、ほとんど通じなかったのは残念だった。

また、リヤドでタクシーに乗った際、ドライバーとお互いの国籍でひと悶着があった。ドライバーは、こちらが男性1名女性2名だったので、夫婦1組とお手伝いの組み合わせだとおもったらしく、私にフィリピン人かとたずねてきた。陽気な彼に乗って、「あなたの国籍を教えてくださいたら答える」と縄田団長が聞くと、「サウジアラビアだ」と答えた。相手はこちらが日本人だといっても信じず、こちらも相手が本当にサウジ人なのかと押し問答した結果、お互い証明書を見せ合って本当だったと納得した。ドライバーは個人事業主なので、人に雇われるということがないとのこと、サウジ人でも成り手がいるのだと知ったのだった。

### サウジアラビアで見た女性の世界・家族事情

本調査では、1日目にダハラーンのサウジアラムコを訪れたため、そのあとワーディ・ファーティマ社会開発センターで所内が完全に男女別々のスペースに分かれているのを見て、違いが際だってみえた。シンポジウムでは、女性職員2名が目以外全身黒づくめで左の席にひっそりと座っており、不思議な存在感を放っていた。一方、女性だけの空間でリラックスした彼女たちの働く姿は、日本の公民館で見られる光景とさして変わらなかった。

また、今回4家族のご自宅にお招きいただき、それぞれの家族模様的一端をかいまみることができた。イードさ



## 片倉もとこの視線の先

んのお宅では、玄関を入るとすぐ右は客間、左は女性専用の部屋、と分けられていた。調査団の女性陣は、1日目は右の部屋で部族長方と懇談し、2日目は同じ広さの左の部屋でイードさんのご夫人、義理の妹とその娘（英語教師をしている）のお三方からお話をうかがった。彼女たちは調査団男性陣の前では顔を隠し、ほとんど姿も現さなかった。女性専用の部屋に入ると、どのお宅でもそうだったように、「さあ、暑いでしょう。どうぞくつろいでください」とすすめられ、アバーヤをバサッと脱いでスッキリ。お互いに素顔をみせ、一皮むければ同じような洋服を着ていることが分ると、一気に距離が縮まる感覚を味わった。た



サーレハさん実家にて、全員車座になり、  
伝統料理カブサをごちそうになる

だし、彼女たちを写真におさめることはNGだった。とはいえ、彼女たちは写真自体は大好きだということが今回よくわかった。家族や友人との記念写真や「自撮り」に熱をあげていて、家族写真をたくさん見せてもらった。

ワーディ・ファーティマのラフマさん宅で迎えてくださったのは女性と子供だけで、調査団の男性陣は訪ねることすらかなわなかった。ラフマさんは開口一番、「MOKOの娘は誰だい」とたずねてこられ、各々自己紹介すると、「よくきたね」と大変喜んでくださった。バラ水をふりかけられ、お香のおもてなしから始まって、ラフマさんは保管していたご自身の伝統衣装を実際に身に付け太鼓をたたき、娘・孫世代までみんな踊れ歌えの大歓迎ぶり！孫たちは、おばあさんの不思議な格好に興味津々のようだった。アラビア語でのやりとりは、スムーズにはいかなかったものの、昔ながらのアラブの女性の世界とはこういうものだ、と見せてくれたように思った。

アブドゥルラヒームさんの奥様サーレハさんのご実家では、サーレハさんのお母様（御年97歳！）も同席くださり、4世代が集合した大家族の姿に圧倒された。大きなお皿にのったカブサ、初めていただいた羊の眼と脳みそ、、、おそろおそろ食べたが、マイルドな味で食べやすく、とてもおいしかった。調査団のために、若い3ヶ月の仔羊を屠って作ってくださったという。一生忘れられない思い出になった。ハナーンさんご一家も子供が多く、サーレハさんは、サウジで核家族化はあまり進まないのではないかとおっしゃっていた。親が老いても子供は家族の側に住み、兄弟で日帰りに会いに行く、と聞き、「少子化」の心配はまだまだ先のことのように思えた。

ワーディ・ファーティマからジェッダ、そしてリヤドに居を移してこられたアブドゥルラヒームさんご一家は、それぞれの地で人的ネットワークを維持・展開されてきた。一方ラフマさんも、調査団がハナーンさん宅にお邪魔していたとき、ワーディ・ファーティマからサーレハさんに電話をかけてこられて、私たちが訪ねてきた興奮を伝えてくれた。動くことをよしとする社会では、連絡手段もどんどんスムーズになり、活発化していく。アブドゥ

ルラヒームさんは、社会開発センター所長時代、同所を中心に夜集まって語りあったり、歌や詩を作ったものだった、と懐かしさと寂しさを含めておっしゃっていた。イードさんも、昔のワーディ・ファーティマはバスもないし、自分の家でいろんな情報を交換しあったものだったが、いまは高速道路ができて、団らんのとかがなくなってきてしまってさびしい、と語ってくれた。ハナーンさんも、ラマダーンはダイニングに家族が集まらないといけなから好き、"Busy in nothing."これがモダンライフだ、とにこやかに話していた。いつでも連絡がとれるから別に会わなくてもいい、となりがちな日本人にとって、家族で一緒に過ごす時間「ラーハ」を大切にするサウジの人びとの生活から学べることは少なくないようにおもった。

片倉もとこ先生が見出した世界は、まだそこにあったが、もう同じ姿はしていない。「沙漠文化」を体現する人びとも動いていく。当時の生活文化を知る人、当時は幼い子供

だったがその要素を受け継いでいる人、まったく知らずに生まれた人、と、世代間ギャップもでてきているようである。「片倉もとこ」という文化人類学者が見ることのできなかった現在の文化の様相は、まだまだ未知数ではあるが、

改めて遺された研究に学び、財団に関わる多様な方がたの経験と知恵を集めて、新たな研究成果の実が結ぶように私も努めていきたいとおもう。

(文：藤本 悠子)

### 写真集の紹介

Megumi Yoshitake

「ARAB Bedouin of the Syrian Desert Story of Family」  
遠藤 仁

既にいくつかのメディアに取り上げられているため、このニューズレターをお読みの方はご存知かもしれないが、女性写真家吉竹めぐみさんの写真集『ARAB Bedouin of the Syrian Desert, Story of a Family』を紹介する。タイトルが示すとおり、シリアの遊牧民のとある一家を、17年にわたって継続的にフィルムに収めたもので、美しい写真のみならず、遊牧民の生活の記録としても、他に類を見ない貴重なものである。

公開されているプロフィールによれば、吉竹さんは東京写真専門学校報道科を卒業後、講談社『現代』編集部を経て、フリーランスとなった。1987年からライフワークであるアラブ世界の撮影をはじめ、以降、17年間にわたりシリアで撮影を続けている。しかし、2011年1月以降の

シリア内戦とその後の「イスラム国」による騒乱の影響により、撮影は途絶している。現在シリアの置かれている過酷な状況を考えると、この写真集は平和であったシリアの日常を切り取った歴史的な記録である。1つの遊牧民の家族を追った記録でもあり、女性でなければ決して見ることができない様子も数多く収められている。筆者もわずかの間、シリアの遊牧民と生活を共にしたことがあるが、男性の身では決して見ることができなかった日々の生活が克明に写し撮られており、初めて目にする遊牧民の生活の様子も多かった。

例えば、シリアが平和な状況にあっても、この写真集の価値は変わるものではない。しかし、現在のシリアの人々が置かれている状況を思うと、本書に写し撮られた人々の笑顔が戻ることを切に願う。

書籍情報：Megumi Yoshitake  
(2014) ARAB Bedouin of the  
Syrian Desert, Story of a Family.  
Milano, SKIRA.

筆者 HP：[http://homepage3.nifty.com/yagitani/megumi\\_ja01.htm](http://homepage3.nifty.com/yagitani/megumi_ja01.htm)  
写真集はサイト (<http://sdsjapan.net/>) などで購入できる。

(文：総合地球環境学研究所  
プロジェクト研究員 遠藤 仁)



「Kahal」(アイライン)。女性達は普段化粧はしないが、みな綺麗である  
(写真集『ARAB』より)。

# ● 沙漠学会写真展示 「半世紀前 片倉もとの見たオアシス ワーディ・ファーティマ」報告

河田 尚子

新緑のさわやかな5月23日・24日、秋田市のカレッジプラザで開催された第26回日本沙漠学会学術大会「意外につながっている！ 秋田と沙漠」の関連イベントとして、当財団の写真展示会「半世紀前 片倉もとの見たオアシス ワーディ・ファーティマ」を実施した。

約半世紀前、サウジアラビアのワーディ・ファーティマにおいて片倉もとが撮影した、今日ではもはや見られない、資料的価値のある写真を中心とした展示を行うこととなった。写真のほかに、ARAMCOで制作されたDVD「架け橋」より編集した片倉もと紹介・インタビュー映像を流し、パソコン上でGoogle Earthを来場者の方々に操作していただき、ワーディ・ファーティマの位置を確認してもらうという、財団の趣旨および活動・調査への関心を高めるような展示に努めた。

膨大な量の写真の中から展示作品を選ぶにあたって、「装う」「働く」「憩う」という大きなテーマを設定し、そこから以下7枚を選んでパネル化した。

「着る」

\*伝統的な民族衣装でせいぞろいした女性たち（1960年代末～1970年代）

\*未婚女性の着るスマーダ（1960年代末～1970年代）

「働く」

\*井戸に水くみに向かう女性（1960年代末）

\*水くみ用の缶を頭に乗せ、伝統的なデザインのホーローやかんをもつ少女（1970年代）

\*コーヒーを入れる子どもたち

（1960年代末～1970年代）

「憩う」

\*詩のかけ合いで遊ぶ女の子たち（1980年代）

\*お香をたく女性（1980年代）

このほか、片倉もとの紹介用に、日干しレンガの家の前で羊を抱く写真パネルを展示した。

幸い2日ともさわやかな晴天で、全体で50名以上の来場があった。会場受付を担当した財団メンバーは、黒いアバーヤ姿で写真説明の補足をした。偶然にも最後に配置された2枚の写真の撮影年代が1980年代であり、来場者の方から、「詩のかけ合いをする女の子たちの背後の砂地にごみがちらばっている、60年代の写真にはごみはないのに」というご指摘を受け、沙漠の変容についても話がは

ずんだ。3月のワーディ・ファーティマ事前現地調査で得た同地の現況についても、パネルと比較しての補足説明ができた。また、小さなマウントフィルムで見ているときはわからなかったが、「お香をたく女性」の写真を引き伸ばしてみると、朝食の皿にパック入りチーズが確認でき、これはアフリカやアラブにフランスの企業から広く輸出されているものだというご指摘も来場者の方からいただいた。このように、学会メンバーの来場者の方々からは、沙漠学会ならではのご感想やご指摘をいただいた。

学会関係者以外にも、片倉もとの津田塾大学の同窓生の方や、沙漠に興味があるという男性、大会シンポジウムで秋田市大森山動物園園長のお話を聞きに来た女性など、一般市民の方も少数ではあるが来られ、「こんな衣装を見るのは初めて」「厳しい気候だろうに、生き生きと生活を楽しんでいる感じがよくわかる」「アラブの怖いイメージが変わった」等、さまざまなお感想をいただいた。1時間以上も会場でいろいろ質問してくださる方もいて、展示を見てもらうだけでなく、来場者とのやりとりも大切だと実感した。

学会関係者、一般の方、どちらの方々も、半世紀前に一人の日本人女性がアラビア半島の一角でこれほど人々の生活に肉薄した調査を行えたことに驚き、感動しておられた。片倉もとこという文化人類学者の存在に、あらためて注目していただけたのではないだろうか。今後もこのような企画で、より大勢の人に片倉もとことその業績、そして「沙漠文化」を知っていただければと思う。

（文：河田 尚子）



展示会場の様子。周囲に写真パネルを展示し、中央スペースでは片倉もとご著作を展示した他、DVD上映を行った

## ● 牛木久雄前代表理事から退任のごあいさつ

2013年11月に創立された当財団は、お蔭様で創立第三年度を迎えることが出来ました。この間、多くの皆様からのご支援のもと、財団では全員結束して各種事業の立ち上げに邁進して参りました。そして特にご報告申し上げたいのは、2014年度に開始された、サウジアラビア王国、ワーディ・ファーティマでの文化人類学調査です。この地は、当財団設立を遺言した故片倉もとこ教授の先駆的文化人類学調査地でした。この度、アラムコ・アジア・ジャパ

ン社の協賛金により計画が実現しました。特記して感謝申し上げます。

このように、設立創成期の一階梯を進んだ感がある第三年度を迎え、財団理事会が刷新されました。創立当初からの構想でもありましたが、代表理事を縄田浩志さんに引き継ぎました。財団新体制に対して、皆様からの変わらぬご支援をお願いする次第です。小職在任中は誠にお世話になりました。改めて御礼申し上げます。

## ● 縄田浩志新代表理事から就任ごあいさつ

このたび、牛木久雄前代表理事からバトンを渡され、代表理事に就任することになりました。片倉もとこ先生がワーディ・ファーティマで現地調査を始めたちょうどその頃に、この世に生を受けた世代です。はじめて沙漠で砂嵐に出会った時、「沙漠への畏敬の念」と「沙漠に暮らす人々への愛」を強く感じたことが、ずっと沙漠に通い続ける理由です。

沙漠のない日本に暮らす多くの人々にとっては「沙漠は

異文化」ですが、「沙漠そのもののうつくしさをひきだす」講演会や展示会や出前授業、沙漠文化に関する学際的研究また芸術活動の支援を行っていく体制をより強固にしていくと共に、片倉もとこ研究資料の整理とその再活用を積極的に推進していく所存です。

今後とも新たな体制のもとで活動する当財団を、引き続き応援くださいますよう、よろしく申し上げます。

## ● 役員体制

新年度に入り、役員の一部が変わりました。今年度より右記の体制で運営してまいります。

|      |       |    |         |          |       |
|------|-------|----|---------|----------|-------|
| 代表理事 | 縄田 浩志 | 理事 | 石山 俊    | 監事       | 増本 敏子 |
|      |       |    | 児玉 香菜子* | (*)は新役員) |       |
| 評議員  | 梅村 坦  |    | 河田 尚子   |          |       |
|      | 大塚 昌子 |    | 郡司 みさお* |          |       |
|      | 片倉 邦雄 |    | 原 隆一*   |          |       |
|      |       |    | 渡邊 三津子  |          |       |

## 📁 活動報告

2014年12月18日

アラムコ・アジア・ジャパン株式会社と「アラムコ・片倉沙漠文化協賛金 (Aramco Motoko Katakura Desert Culture Fund)」に関する協定を締結

2015年3月25～29日

ワーディ・ファーティマへの事前調査

2015年5月22～23日

写真展示会「半世紀前 片倉もとこの見たオアシス ワーディ・ファーティマ」を実施

## 📁 編集後記

創刊号発行から1年以上が経ち、ようやく第二号を完成することができました。2015年度はサウジアラビアへの調査に加え、財団の活動をさらに進めて行く予定です。ニューズレター、HPで情報発信につとめてまいりたいと思います。

(古澤 文)

## 📁 そのほかの報告

2015年5月22日

日本沙漠学会第26回学術大会にて沙漠学会賞を受賞した大場章弘氏(中央大学研究機構・慶応義塾大学SFC研究所・国立研究所)、巖網林氏(慶応義塾大学環境情報学部)に副賞として「片倉もとこ賞」(純銀製メダル)が授与されました。

## 📁 訃報

本財団の評議員を務めてまいられました吹田靖子評議員が2015年12月13日にご急逝されました。吹田評議員には設立時より財団運営にご尽力頂きました。心よりご冥福をお祈りいたします。

## ✉ 片倉もとこ記念沙漠文化財団事務局

〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷 2-21-1-610 号室

TEL: 03-6407-9873 FAX: 03-6407-9090

Mail: office@moko-f.com Web: http://moko-f.com

片倉もとこ記念沙漠文化財団ニューズレター No.2

Motoko Katakura Foundation for Desert Culture News Letter

2015年12月25日発行

編集: 情報発信委員会 (渡邊三津子, 古澤文, 藤本悠子)

発行: 片倉もとこ記念沙漠文化財団